

平成26年4月26日～27日：阪神甲子園球場

講師：赤井淳二委員長、他日本高野連審判委員

モデル校：兵庫県立明石高校・兵庫県立星陵高校・大阪府立豊島高校

兵庫県立川西緑台高校、兵庫県三田高校、大阪市立桜宮高校、大阪私立興国高校

◆二人制フォーメーションのイメージトレーニング

○世界では二人制が主流（基本）である、今回、イメージトレーニングを行う目的は、二人制の利点を四人制に生かすことが目的である。高校野球は四人制で行うが、二人制のフォーメーションをイメージ、経験することで視野が広がり、声かけなどのコミュニケーション等にも余裕ができ技術の向上が見込まれます。オープン戦では積極的に二人制にチャレンジしてください。二人制での重要事項は「ポーズ（状況判断）、リード（予測）、リアクト（行動）」です。

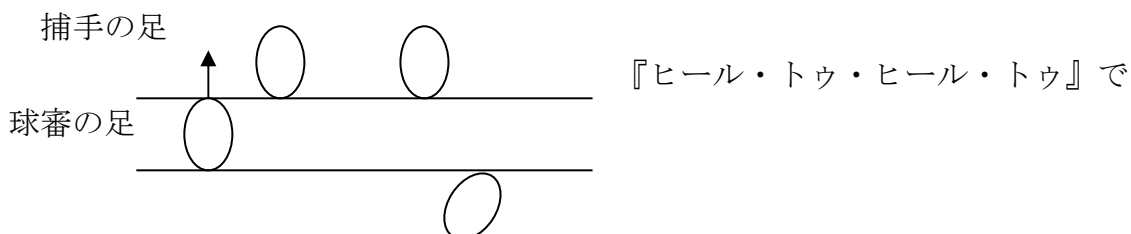
◆ジェスチャー

- 全てに共通するが、スタートが大切で、視線を下げずに必ず止まって見る。
- 球場のどこから見てもわかるようなデクレアをすること。  
(大きな声を発声しても聞こえないケースもあるが、デクレアに合わせた声の発声を)
- プレイに合わせたデクレアをすること。肝心なところは大きめなデクレアをすること。
- ホームランについて、右腕を止めることなくクルクル回す。右腕が止まってしまうとアウトと誤解されてしまう。
- 「セーフ・オフ・ザ・バック」のデクレアをする時に、足の離れた場所を見ずにデクレアしているケースを見受ける。足の離れた場所を見ながらデクレアすること。
- ゴー・ストップ・コール。その後リラックス。
- 判定後、元にいた位置に戻る時には駆け足で戻ること。
- ハンズ・オン・ニー（背筋を伸ばしアップライトに構えること）
- スタンディングルック（腰より高い飛球等状況により使い分ける）

◆球審の基本動作及び投球判定

○ヒール・トゥ・ヒール・トゥでスロットルポジションをとること。  
打者に近い足から入り、遠い足の順で。近い足は投手に真っ直ぐに向けること。打者から遠い足は外に開いても良いが体全体は投手に正対するように構えること。

[右打者の場合]



外し方は、入り方の逆にする。遠い足、近い足の順で一球ごとリラックスに。

リラックスの姿勢は体重が左右に半分半分かかるようにすること。

塁審のリラックスも同様であります。

○常に視線を下げず、目をつむらない。ミットに入るまで目を切らない（トラッキング）。

○ゲームでは、早目に待ち構えること。（投手が投げ込むときに動いていないこと）

#### ◆フォースプレイ

○打者打順によってポジショニングを変える

○送球に遅れる事のないよう、スタートを大切に適切な位置を取り（プレイの行われるところに正対する）、送球は首から上を動かし追うこと。

#### ◆タッグプレイ

○スタートを大切にし、タッグを待ちかまえられるようにする。

○ボールの確保の確認も忘れずに。

#### ◆盗塁の判定

○三塁盗塁の場合、スタートのポジションに配慮し、タッグを待ちかまえられるようにする。

#### ◆打球に対する反応と判定練習

○ラインキープとラインを捨てることの判断を大切に。

#### ◆フォーメーション

○3分割（走者なし）

○2分割（2塁審が中に位置した場合）

・センター方向への飛球の追い方

1・3塁審はボールを追う時に、『ゴー・アウト』等声を出して手を上げ合図する。

追わない審判は次のプレイに備える。

○1塁の審判は打者が走者になる瞬間を良く見ておくこと。

○守備妨害適用か非適用かの判断にあたって、守備機会とは『ワンステップ・ワンリーチ』ただし、外野手の守備機会もあることも忘れないように特にライトゴロ。

#### ◆座学

○北北海道からの質問

Q. 試合中に地震が発生したら、どう対応するのか？

A. 甲子園では今年の夏から実施するようにしているが、携帯電話等から、緊急地震速報が出される。その場合、控え審判がグラウンドの審判に伝え試合を止める。

○新潟県からの質問

Q. R3塁、スクイズの場面、投球した球をスクイズに行き空振り、打者の顔に当たったケースがあった。死球の時は臨時代走にするが、この時の打者の対応はどうすればいいのか？

A. 当たり方にもよるが、打者の様子を見て対応することとなる。そのまま打席に立っても良いし、代打でも良い。

## ◆本塁周辺の想定プレイ

### ○キャッチャーフライ

- ・捕手が左右どちらかにスタートした方向の足を後方に下げながらスタートする。捕手に近づきすぎず、接触しないよう距離を保つ。
- ・グラブの腹が見えるよう位置取りすること。
- ・観客席から見えにくいバックネット付近（一、三塁のフェンス付近も同様）の判定は、対角の観客席からは判定が見やすいが、打球の飛んだ側からの観客席からは判定が見えにくいので、判定した位置から、どこから見てもわかる位置へデクレアを繰り返しながら見える位置まで移動すること。

### ○反則投球

#### ・【打たなかった場合】

イリガリーピッチ（発声）→タイム→投手に知らせる→ボールを付す→カウント確認（BSOの表示がある場合、表示の確認も）

#### ・【打った場合】

イリガリーピッチ（発声）→フライキャッチされた瞬間→タイム→投手に知らせる→ボールを付して打ち直しの指示→場内放送→カウント確認（同上）

### ○出会い頭のプレイ

- ・バントした打者と守備に向かう捕手が衝突した場合、ノーボイスで手を横に大きく広げ、プレイを続けさせる。

### ○オブストラクション

- ・「すでにボールを持っている時だけしか塁線上に位置することができない」のボールを持っているとは、ボールがミット内にありタグに行くときの意味である。
- ・レガースは、打球から身を守る道具であり、スライディングをブロックする道具ではない。

### ○タイムプレイ

- ・ホームベースと対象となるベースが視野に入るようダートサークルを上手く使い見る。
  - ・ランダウンプレイのラインアウトに注意する。
- 例) 2死1・3塁、1塁走者が1・2塁間で挟まれた場合。1Uおよび2Uは1塁走者をアウトと判定する時には「ヒズアウト、ラインアウト」とデクレアする。「ラインアウト、ヒズアウト」とデクレアしないこと。

### ○ナッシング

- ・3塁へのスチールの際、捕手からの送球が守備妨害のない打者（バット含む）に当たった場合、ノーボイスで手を横に広げ、プレイを続けさせる。

### ○インターフェア

例) R 1塁、2塁へスチール

#### ・【1ストライクから空振りの場合】

指さしポイント（発声）→セーフになったら→タイム→打者に知らせ、打者アウトを宣告→セーフとなった走者を1塁へ戻す→場内放送→試合再開

#### ・【2ストライクから空振りの場合】

指さしポイント（発声）→セーフになったら→タイム→打者に知らせ、三振アウトを宣告→守備の対象である走者をアウトとする→場内放送→試合再開

### ○打撃妨害

例) 無死3塁、打撃妨害されながらもファーストゴロの処置

指さしポイント（発声）→状況を見る→3塁ランナーホームイン、打者はアウト→タイム

→打撃妨害のシグナル→ホームインしたランナーをベンチから3塁に戻し、アウトとなったバッターは1塁→無死1、3塁のケースを作って選択権を与える（状況がわかっていないようなら選択権がある事を口頭で説明しても良い）→①【打撃妨害を選択】無死1、3塁で試合再開 ②【プレイを生かすこと選択】1得点1死走者無しで試合再開

◆フォースプレイを主体とした塁上のプレイ

○例) 無死満塁三塁線のゴロ、野手が捕球し三塁ベースを踏んだか、踏まないかにより本塁への転送後のプレイがフォースプレイかタッグプレイかに変わる。三塁ベースを踏んだ場合、三塁塁審は球審に分かるようアウトを球審に送ること。(チームワーク)

◆ランダウンプレイ

○ランダウンプレイが始まったら、いろいろなプレイ（オブストラクション・インターフェア・ラインアウト・同一塁上の二走者）を想定しながら1/3の位置に移動し、落ち着いてプレイを見守る。真ん中の1/3については二人のテリトリーであるので状況を見ながら、踏み込み、タッグとボールの確保の確認を行う。(次走者にも気を配ること)

○ベース付近のノータッグの場合、発声のみとする。

○ラインアウトのケースでは「ヒズアウト、ラインアウト」とデクレアする。「ラインアウト、ヒズアウト」ではない(タイムプレイの時にはトラブルのもとになるため)。

◆マウンド周辺

○投球と送球の区別をしっかりと把握する。

投球とは投手が打者に対して投じた球

送球とは対象に向かって、手及び腕でボールを送った球

○リリースの時までプレイトを離れない位置から投球すること。

◆投球判定

高目の限界線にチャレンジを

◆4人集まって協議したら、その場で指示し、指示後に4人が元の位置に戻る事

◆ジャッジに対する申し出(抗議)がきた場合

塁審への申し出(抗議)と思われる場合でも球審のところに来るケースがあると思います。その場合、球審は当該審判の所に選手と行き、当該審判から説明させることが望ましい。また、場内放送も当該審判がすることが適切な時もあるので、オープン戦の時から場内放送等をするように心がけて下さい。

《所感》

審判は、一生懸命プレイしている選手のために、心を込めて判定(お知らせ)する責任がある。選手は審判に全幅の信頼をしていると教えて頂きました。

プレイには何一つ同じ状況はないので、その瞬間やその1球に心を込めて対応できるよう、毎試合チャレンジしたいと改めて感じさせて頂きました。これからも、選手と共に汗をかいてまいります。